

15 脳動脈瘤術前における fluorescein angiography の経験

鈴木 恭一・宗像 良二・生沼 雅博

遠藤 雄司・佐久間 潤・松本 正人

佐々木達也・児玉南海雄

福島県立医科大学脳神経外科

【目的】我々が脳動脈瘤手術中に行っている fluorescein を用いた脳血管撮影に関して報告する。

【対象・方法】対象はクリッピング術を施行した脳動脈瘤 20 症例。クリッピング後に青色光で術野を照射し、fluorescein を静注した。脳血管内を流れる fluorescein が青色光により励起されて発する蛍光を、濾過フィルターを通して観察することにより、動脈瘤周囲血管の血流温存を確認した。

【結果】20 例全例で、親動脈とその分枝および穿通枝（眼動脈：1 例，後交通動脈とその分枝：12 例，前脈絡叢動脈：12 例，視床下部動脈：2 例，Heubner 反回動脈：2 例，レンズ核線条体動脈：4 例，後視床穿通動脈：1 例）から発せられる蛍光を明瞭に観察し得た。動脈瘤からの発光は認めなかった。

【結論】本法を用いることにより、動脈瘤周囲血管の血流温存を簡便に確認することが可能であり、脳動脈瘤手術に際して有用であった。

16 M1 early frontal branch 分岐部動脈瘤

金城 利彦・黄木 正登・林 真司

公立置賜総合病院脳神経外科

【はじめに】中大脳動脈本幹（M1）の early frontal branch 分岐部に発生した動脈瘤（M1-EFB AN）10 手術例を経験したので報告する。

【症例】当科で手術した中大脳動脈瘤 73 個のうち、M1-EFB AN は 10 例。年齢は 48 歳から 74 歳，平均 62.4 歳。男 3 例，女 7 例。破裂が 3 例，未破裂が 7 例。多発性が 5 例。

【手術法】前頭側頭開頭を行ない，シルビウス裂を十分に分け，脳べらを前頭葉と limen insulae にかけて術野を展開して動脈瘤柄部を剥離する。

Early frontal branch や動脈瘤の近傍にはほとんど必ず穿通枝があり，これを十分に観察して M1 に平行にクリッピングする。

【結果】術後，2 例で穿通枝領域に梗塞が出現して，1 例で症状を伴い後遺した。他の 1 例では無症状であった。破裂 3 例でも転帰はいずれも GR であった。

【結語】M1-EFB AN の手術手技の要点についてビデオで供覧し，従来の報告の文献的考察を行なう。

17 血栓形成範囲の術前診断が困難であった未破裂前交通動脈瘤の 1 例

奈良岡征都・畑山 徹・竹村 篤人

伊藤 勝博・鈴木 重晴

青森市民病院脳神経外科

症例は 66 才男性で，構音障害と歩行障害にて発症し，脳梗塞の診断で当院内科に入院した。保存治療で症状は軽快したが，MRA にて前交通動脈瘤が疑われ当科に転入した。CT および MRI でも鞍上部に血栓化動脈瘤と思われる腫瘤を認めたが，脳血管撮影では動脈瘤がほとんど造影されず，前交通動脈には不規則な膨隆所見を認めるのみであった。したがって，前交通動脈瘤は大部分が血栓化していると考えられたが，非血栓化部分の破裂，あるいは瘤内血栓の遊離や親動脈閉塞の危険性を考慮して手術治療を行った。

術中所見では，術前に確認できなかった重複前交通動脈を認め，その分岐部に動脈瘤が発生していた。更に，動脈瘤の非血栓化部分と推測した部位は，血栓化せずに残存した重複前交通動脈の 1 本であることが判明した。最終的に動脈瘤頸部クリッピングを行ったが，完全血栓化前交通動脈瘤に重複前交通動脈が合併している場合には，血栓形成範囲の診断に注意が必要と思われた。